

論文提出者氏名：金沢百枝

論文題目：ジローナの〈天地創造の刺繍布〉研究-ロマネスクの宇宙図と創造主礼賛-

金沢百枝氏の博士学位請求論文、「ジローナの〈天地創造の刺繍布〉研究-ロマネスクの宇宙図と創造主礼賛-」は、西洋中世ロマネスク美術を代表する優品の一つであるジローナの〈天地創造の刺繍布〉に新たな光を当て、その歴史的意義を図像学的手法で解明した独創性あふれる学問的成果である。

一次資料としての記録を欠く本作品に関して、新しい視点と手法でアプローチすることは勇気ある学問的企てと言える。金沢氏は、先行研究を十分に咀嚼するとともに、〈天地創造の刺繍布〉の実地調査と関連資料・文献の幅広い探索を行い、作品が置かれるべき図像的コンテクストを可能な限り再構成することによって、説得力のある分析と独自の考察を展開した。美術作品の緻密な図像解釈と作品をめぐる具体的な制作状況とがリンクする様は圧巻である。その結果、本論文は美術史学の専門的な作品研究であると同時に、歴史学や思想史とも境を接する雄大な視野を持つ総合的な文化研究に成り得たのである。

本論文は、序論と6つの章と結論で構成され、図版リスト、資料集、参考文献一覧が付加されており、図版そのものは議論の展開に即する形で本文中に組み込まれている。以下、論文の構成に則って議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序論で作品の研究史を踏まえつつ、図像プログラムの解明という自らの問題設定を明らかにした金沢氏は、〈天地創造の刺繍布〉を、「縁部」「円環部」「聖十字架伝」の3つの部分に分けて論じていく。第1章「宇宙図として刺繍布」で扱うのは、「円環部」を取り囲む「縁部」に表された宇宙の時空間を象徴する図像モチーフである。その風配図や月暦図に古代から中世へ向かう過渡的性格を見出しながら、他方で月暦図に関わる農事暦の統計的調査から図像内容の北ヨーロッパ的特徴を抽出して、注文主や制作者の問題に考察材料を与えたのが注目に値する。

第2章から第4章までは、中心を成す「円環部」が対象となる。第2章「礼讃図として刺繍布」では、〈天地創造の刺繍布〉とローマ型創世記図像とのつながりが明確に論証され、新たな美術史的成果として審査委員から大きな評価を得た。さらには、「『詩篇』第148挿絵」などとの関連性から本刺繍布は創造主を讃える「礼讃図」であると規定し、聖土曜日の復活徹夜祭の典礼にその用途を見出すという説得性のある学説を展開している。

天地創造図に変換された礼讃図という氏の主張は、第3章「礼讃図の二匹の海獣-ケートスの系譜とドラゴンの誕生-」においても、別の側面から補強されることになる。円環部下部に大きく描かれた二匹の海獣が、それぞれ古代の海獣ケートスから魚へ、ケートスからドラゴンへと変容する中間的形態を有することを、図像の綿密な比較と翻訳の検証によって明らかにしたのは、既に興味深い文化史的貢献である。その上で、二匹の海獣を左右対称に配置することから、刺繍布の「礼讃図」起源を指摘し、一貫性のある解釈を立ち上げたのである。

第4章「新しい礼讃図の生成-「天地創造型マエスタス」と瞬間的創造-」では、円形枠に天地創造場面を収める構図そのものについて考察した。金沢氏は、12世紀以降増加する「天地創造型マエスタス」と命名されうるこの図像タイプの最も早い作例としてジローナの刺繍布を位置づけ、天と地の区分や万物の表現に重きを置く古い礼讃図から、円形枠に天地創造図を収める新しい礼讃図への移行的形態として円環部の構図を捉える独創的な見解を提出する。ただし、「天地創造型マエスタス」が宇宙の「瞬間的創造」という創世記解釈を表しており、ジローナの刺繍布にもその萌芽が見られるとする斬新な仮説に関しては、未だ推論に留まり、さらなる検討を要するとの意見が審査員から出された。

第5章「約束された楽園-聖十字架発見の物語-」で、金沢氏は刺繍布の下部に表された聖十字架発見譚の役割と意義について解明を試みた。聖十字架発見譚が写本などで、創世記注解のよう

な宇宙誌的な文脈でも用いられている事実から、ジローナの刺繍布においてもこの部分が宇宙図や天地創造図と組み合わせられているのは図像プログラムとして必然性があると見なし、聖十字架の崇敬がある聖金曜日の典礼とも関わりがあると推定した。興味深い解釈ではあるが、刺繍布の聖十字架発見譚ともっとも共通性の多い、終末論的な内容を持つバルドリーノのサン・セヴェロ聖堂壁画の考察が不十分な点に課題が残るという指摘が審査員からあった。

第6章「<天地創造の刺繍布>をめぐる諸問題」では、図像プログラム解明の成果を受けた上で、「もの」として刺繍布の制作と用途を再検討している。すなわち、制作地をカタルーニャと推定し、制作年はローマの改革教皇庁とカタルーニャのバルセロナ伯家との密接な関係およびローマ型創世記図像の伝播を勘案すると、1080年から1100年頃の可能性が高いとした。この他、制作者にノルマン人の関与を認め、用途については聖金曜日と聖土曜日の典礼に使われた壁布とするなど、妥当性のある仮説を順次提示し、作品研究を歴史学的にも進展させるものとして審査員から肯定的な評価を得た。そして結論では、「礼讃図」としての刺繍布の位置づけを総合的に行うとともに、様式ではなく図像から見たロマネスク美術再検討の可能性、並びに刺繍布の国際的性格を示唆して、論文を締めくくっている。

本論文は総体として見ると、オリジナル作品と自己の感性との出会いを基盤にして、1個の作品を徹底的に検証し精細に読み解く模範的な事例となっている。個々のモチーフと全体の図像プログラム、図像解釈と制作状況とが整合性を持って有機的につながるその説得力は強く、「礼讃図」として<天地創造の刺繍布>を捉え直す、真に新しい研究寄与と成り得ている。美術史学であると同時に図像文化史でもあるような、斬新な方法論的立場を定立したと言ってよい。加えて、刺繍布を織り上げるような濃密で手厚い叙述、高度な専門性を帯びつつも明快でよく練られた文章、整理された論点の提示方法、鮮やかなカラー図版を本文中に挿入したレイアウト等々、形式的な側面も高く評価された。部分においてはやや大胆な推論、調査の不足、注記のミスや誤字等が散見するとの指摘もあったが、それらは瑕疵に過ぎず、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものではないことが確認された。

以上の審査の後、審査員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、金沢百枝氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。